

畳表の経糸材質の違いによる「たるみ」発生とその防止対策

農業研究センター い業研究所 加工部

研究のねらい

化学繊維と錦糸との混紡経糸は、糸切れ防止などから畳表の製織を容易にしている。しかし、畳敷き込み後に「たるみ」が発生しやすく、消費地で問題になっている。

そこで、その発生要因と防止対策について検討した。

研究の成果

1. 「たるみ」発生の変因

- (1) 経糸の伸度の大きいビニロン系と錦糸を混紡した経糸では、「たるみ」が発生しやすい。
- (2) 経糸巻取り棒(ちきり)の歪みにより、経糸の張り強度に差が生じ、それを基因とする「たるみ」が見られる。
- (3) 畳床に畳表を張り付ける際、引張り強度が弱い場合、「たるみ」が発生しやすい。
- (4) 気温や湿度が高い季節において発生しやすい。

以上の各変因が重なった場合に、「たるみ」の発生頻度は高くなる。

2. 「たるみ」の防止対策

- (1) 伸度の差が小さいポリエステル系と錦糸の混紡経糸を使用する。
- (2) 経糸巻取り棒(ちきり)の歪みが5mm以上のものは、歪みを修正して使用する。
- (3) 伸度差の大きい経糸を使用した畳表は、畳床に張り付けの際、霧吹き処理を行うと同時に、張り強度を畳表断面積1c㎡当たり3.5kg以上にする。

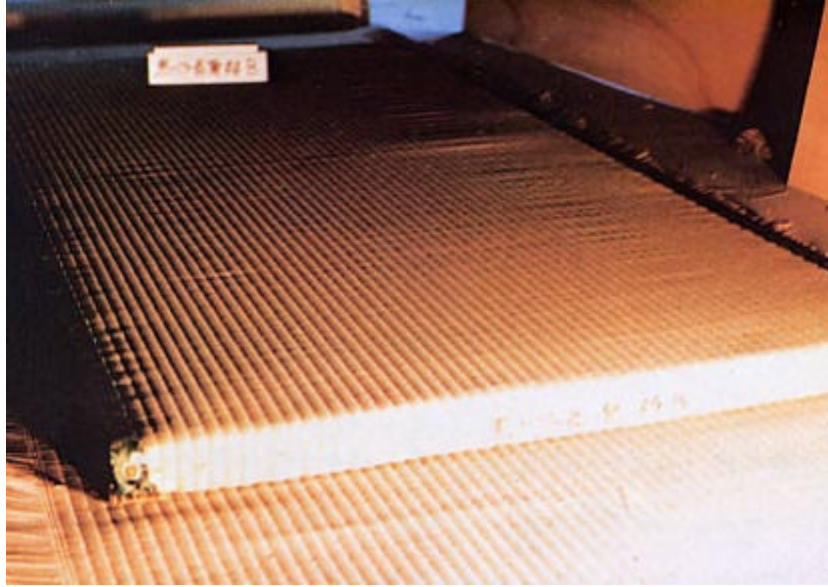


写真 たるみの状態

経糸の一部がゆるみ、畳表にしわができた状態を「たるみ」といい、流通上、傷とされている。この写真では、両端に「たるみ」が見える。